

池窪弘務作品集 1 小説 2

[ホームに戻る](#)

目次 [リンクをクリックして下さい。](#)

[作品 1](#) 居酒屋やすらぎ

星と泉 9 号 (2012 年)

[作品 2](#) 補^ふ巖^{がん}寺参る

星と泉 14 号 (2013 年)

[【後記】](#)

一 絵を描く男

駅は通勤客でごった返していた。立ち止まると流れに逆らう杭のようになった。人の流れは杭を上手く避けるもんだと田代順平は思った。立ち止まることもなく家と職場の間をいつも無意識に流されていた。

K駅はJRから私鉄への乗り換え駅だ。この駅を三十七年間通過したことになる。ほとんどが一人だった。

職場は嫌いだった。それは、働いている間変わらなかった。仕事好きの男を見ると憎んだ。無意識に階段を下りる。体が通路を覚えている。足が別の生き物のように動く。とりとめもない思いが頭を過ぎる。人と話す時いつも感じていたのは、軽蔑より侮りだった。劣等感が彼を臆病にさせた。軽蔑される方がましだった。私鉄のホームへ降りた後、西出口へ急ぐ。この駅で途中下車し始めたのはいつのこと

だろう。一日の中で少しだけ違う時間が欲しかった。定年の今日もその習慣を変えることはなかった。花束を持っていることに気づいて、「その他のゴミ」に捨てた。記念品の包みを開けた。中身は分かっている。希望を聞かれて、「電波時計」と答えた。「そら、正確ですわ」。送別会の幹事が言った。就業時間の終了と同時に職場を飛び出す彼への揶揄だろう。つけていた千円時計を外して電波時計を腕にまいた。千円時計は少し迷ったがゴミ箱に捨てた。西出口の一角は飲食店が密集し、店を縫うように路地が入り組んでいる。最初の通りを右に曲がる。店の名前は何だっけ？ 店で田代は誰とも喋らなかつた。無口な兄いに生ビールとつまみを一品注文して、数分で食べて店を出る。五分の寄り道がいつの間にか通勤の回路に組み込まれていた。肩が触れるほどに客と接近しても喋ることはなかった。店には常連もいない。いつも違う顔が並んでいた。誰もが黙々と食べ、わずかに店員と言葉を交わし、夜の町に消えていった。

高架を見上げると、満員の電車が轟音を立てて入

ってくる。今日が最後で、もう、あの中の一人になることはない。

立ち飲み屋はいつものように混み合っていた。店の外に三、四人待っていた。少し覗いたが、顔見知りの兄いが右手の人差し指で1、左手の親指と人差し指で0を作った。十分ほど待ってくれとの合図だ。田代は腕時計を見た。正確な時計はいつもの時間より二十分早い。今日は早めにお役ご免となった。少し早い時間の方が混み合っているのだ。知らなかった。今晚は妻が手造りのご馳走で待っているだろう。聞いてはいいないが間違いない。四十年近くも一緒にいるのだから。

店の名は「だるま」というのか。きびすを返したが、少し呑みたかった。今日は金曜日だ。いつも一番ほっとする週末なのに忘れていた。若い男女で路地は溢れている。三月は送別会のシーズンだ。年寄りが顔を赤らめ何かわめいている。盛んに頭を下げている。握手を繰り返している。三日前の自分だ。逃げるように人混みを避けた。今まで入ったことがない細い路地がある。何気なく曲がった。路地は霞

んでいた。煙草や焼き鳥の煙ではなくて、薄い霧のようだ。ぼんやりと、提灯が見えた。不明瞭な文字だが、居酒屋やすらぎと読めた。

路地は石畳だった。所々石が欠けている。田代は奇妙な場所に迷い込んだような気がした。歩いて、居酒屋が近づかない感覚にとらわれた。「逃げ水」みたいだ。その感覚が消えると、いつの間にか提灯の前に立っていた。今時珍しい板張りの引戸だった。田代は開けるのを躊躇したが、思い切って戸を開けた。

中は薄暗い。目が慣れるのに時間がかかった。テーブルが一つと奥には上がり框があり、狭い座敷になっっていて、座卓が一つあった。

「らっしやい」

右の奥から声が出た。気がつくのと、四十がらみの男が立っていた。他に従業員はいなかった。

「生ビール」

椅子に腰を下ろしながら言った。

「あらへん」

「ない……」

「酒は一つだけや」

居酒屋の主人だろう。ぶっきらぼうに言った。

「それでええわ。冷やしてや」

返事はなかった。一杯飲めばすぐに引き上げよう。つまみを注文する気にもなれなかった。とんと目の前にコップ酒が置かれた。一口飲むと、日本酒ではなかった。洋酒でもない。生ぬるく奇妙な味がした。――サラリーマン生活の最後がこれか――

田代は独りごちた。酒はゆるりと胃に落ちる。ぼんやりとくすんだ壁を眺めていると、ふと、自分はいつも「その他」だったなあと思った。子供の頃から「その他」だった。主役になることはなかった。サラリーマンになってもそうだ。病院薬剤師としての三十七年間、最後までひらの仕事をしていた。主任になったが管理職になることはなかった。その能力もなかった。いつも使われていた。

「薬剤師か……」

給料の割に責任の重い仕事だった。「責任は上にとる」は建前だ。やはり手を染めたものに重責がのしかかった。

「それも今日で終わる」

ふうっと、深い息をした。だが、何年も前から夢に見た日なのに、期待していた突き抜けるような歓喜が湧いてこない。

「これでいい。明日からは自由だ。何物にも縛られない」

トンと、目の前に枝豆の小皿が置かれた。

「頼んでへん」

田代は上目遣いに主人を見た。

「定年かいな」

まだ花束を持っていたのかと、あわてて周りを見るが、古ぼけた鞆以外何もない。

「あいつは絵を描いてるんや」

主人は座敷の方に目を遣った。男はテーブルの上に画布を置き、顔をつけるようにして描いていた。店に入った時、田代は男に気づかなかった。いや、そこには誰もいなかった。

「絵を見たってえなあ」

主人は言った。

いつもの田代なら関わるのを躊躇しただろう。だ

が、その夜の田代は違った。男が何を描いているのか無性に知りたかった。

上がり框で靴を脱ぎ、座敷に上がった。部屋に窓はなかった。田代は遠慮がちに男のテーブルに近づき、絵を盗み見た。キャンバスいっぱい描かれているのは炎だった。炎が生き物のように逃げ惑う人々に襲いかかっている。人の数も多い。数え切れないほどだ。赤子を抱いた女もいる。着ているものも今とは違う。もんぺ姿の女、軍服を着た男、老人、少年、親指ほどの人間がキャンパスいっぱい逃げ惑っている。電線に全裸の男と女が引っかかっている。その上を無数とも言える飛行機が舞っている。飛行機から落とされている黒い点は、爆弾だろう。

「戦争の絵ですか？」

田代は男に声をかけた。反応はなかった。

「聞こえてへん」

主人は言った。

「ここにいてへんのや。ちやうとここにいてるんや」
意味が分からない。

「昭和二十年八月十四日や。この駅に空襲があった

んや。天皇はんの寝言があつた前の日や。午後二時。
こいつの時計は止まつた」

田代が生まれたのはその翌年だ。

「ようけ人が死んだ」

主人は言った。

「こいつも死んだ。一日早よう戦争が終わつてたら、
みんな生きとつた」

田代は上がり框を降りた。

*

習慣のように身動きの出来ない通勤電車に吸い込まれた。これから三十分近くノンストップで走る。有料の特急も乗れたが後悔はしなかつた。満員の通勤電車に乗り続け、自分は社会という網目からこぼれ落ちずにすんだのだと、田代は思った。

車窓に男の描いていた絵が現れた。逃げ惑う人々、爆音、吹き飛ぶ肉塊。あの中に父か母がいたら、自分は今ここにいたのだろうか。全く違う人間として、この通勤電車に乗っていたような気もする。いつの間にか絵は深い闇にかき消された。

勤めていた時と同じ時間に目が覚める。新聞を取りに行つて居間に行く。妻はまだ起きていない。テレビのリモコンを押す。食パンとインスタントコーヒーを飲んで朝一番のニュースを見た後、書斎に入る。書斎は四畳ほどで机と本棚が大部分を占めている。夜は寢床を引くと部屋は一杯になった。ここでパソコンをさわったり本を読んだりしながら、一日の大半を過ごしている。時々職場を思い出すこともある。職場のざわめきが聞こえてくる。だが、自分がいない職場を上手く想像することが出来なかった。

今日は本棚を整理しようと思った。何年も触ったことがない一番下の段は、乱雑にアルバムや名簿が突っ込んである。アルバムを引っ張り出すと、見覚えがある古い雑誌が一緒に出てきた。M・Y緊急特集号。Mが星形の奇妙な台座の上で胡座をかいて座り、日本刀を両手で持って垂直に立っている。パンツ一枚の裸である。本の間には、彼の自決を伝える古い新聞と小学校の卒業アルバムが挟まっていた。

茶色に変色した粗末な卒業アルバムを開いた。表紙は紐綴で、台紙は十枚足らずの冊子だ。職員の写真、クラスの集合写真。寄せ書き。職員住所録。もう一度、クラスの集合写真をじっと見つめていると覚えている顔も意外にある。彼らも、自分と同じように歳を取りこの世のどこかに生きているのだろうか。でも、今は、この中の誰とも付き合いはない。消息も知らない。

*

Mの本もそろそろ捨てる時期かもしれないと思った。Mのことよりも、四十年前の新聞の方が面白い。しばらく読んでいると顔がかゆくなった

本棚にもMの本が並んでいる。学生時代から、彼が死ぬまでの間かなりの数彼の作品を読んだ。Mフリークだったが、死後はほとんど読まなくなった。

Mの死はショックだった。テレビではMの声より、自衛隊員の野次の声の方がよく聞こえた。田代は最初の勤めを半年ほど挫折して、菓子問屋の実家に帰っていた。

「気違いだ」という言葉が紙面に踊った。番頭さん

は、「これは映画になると」騒いでいた。

パソコンの辞書でMを引く。

【M】

小説家・劇作家。東京生れ。東大卒。二十世紀西
欧文学の文体と方法に学んで、秩序と神話を志向、
純粹日本原理を模索して自裁。作○○、××、△△
など。（一九二五～一九七〇）

自裁という言葉に目がとまった。

Mは太宰治を嫌っていた。だが、一人で死ねなかつた。玩具のような軍隊を作り、若者と情死した。太宰と同じだった。

Mの本をダンボール箱に詰めた。冷蔵庫の扉に張ってある資源ゴミの日をマジックインキで箱に書いた。

一日は流れるように過ぎていく。昼飯を食べ、ナイターを見ながら夕飯を食べると、眠る時間がやって来る。目覚めると一日が始まる。その繰り返しだ。

*

通勤時間を逆さまに辿りたい。これも定年後のさ
さやかな夢の一つだった。

夕方、都心に向かうがらの電車に乗った。
時々、すし詰め of 電車とすれ違う。爽快感に自然と
笑みが浮かんだ。

K 駅で降りる。―「だるま」だったよなあ―と
ひとりごちて西出口を出た。その時、ふと、気が変わ
った。定年の夜に立ち寄った居酒屋に行きたくなっ
た。無口な主人と奇妙な客。妙な味の酒。それらが
懐かしいもののように頭に浮かんだ。

引き戸を開けた。前と同じで中は薄暗かった。座
敷に客が一人座っていた。大声で何か話している。

「らっしやい」

「酒を」

主人は返事をしなかった。

「何かつまみはあるの」

座敷の客が大声で言って高笑いをした。声と笑い
がちぐはぐだ。

「エスカルゴがあればそれだ」

また、笑った。

「鼠の焼いたのでも食べや。K駅の鼠はよう肥えてるで」

主人が言った。客に聞こえたかもしれない。

田代は客の方を見た。どこかで見た顔だ。Mだ。スポーツ刈りで相手を射るような眼をしていた。

「もう一杯シェリーをもらおう。二十年か三十年がいいねえ」

座敷からまた大声がした。主人は苦笑いを浮かべた。

「どぶろくがシェリー酒か。四十年でも五十年ものでも出したるで。あいつは味覚オンチや」

主人は言った。

「酒は銚子で。猪口を二つ」

田代は言った。

*

Mはちらっと田代に目を遣り、興味なさそうに目をそらした。その目つきには慣れている。「悔り」の目つきだ。銚子をテーブルにおいて、猪口をMの前に置いた。

「変わった時計をしているね」

Mは時計に興味を示した。

「電波時計です」

「電波時計。どうなっているの？」

「詳しくは知らないですよ。でも一秒と狂わない」

「それは大切なことだ。時計は正確なこと以外はど
うでもいい」

Mは例の高笑いをした。

銚子を差し出すと、

「おう」

と、言って猪口を差し出した。

「あなたの最高作はなんですか」

唐突な問いにMは一瞬厭な顔をした。猪口を飲み
干すと、田代の猪口に酒を注いだ。

「返杯というのは悪しき習慣だね。非衛生だ」

気詰まりな時間が流れた。

「金閣寺だ」

Mは言った。

「後はつまらないよ。仮面の告白なんて書かなかつ
たことにして欲しい。人生なんてつまらないよ」

また、高笑いをした。

「豊穰の海は最後の数枚が上手くいったね。後はだめだ」

Mは目を閉じた

『これと云って奇功のない、閑雅な、明るくひらいた御庭である。数珠を繰るような蝉の音がここを領している。そのほかには何ひとつ音とてなく、寂^{じやくまく}寞^{まく}を極めている。この庭には何もない。記憶もなければ何もないところへ、自分は来てしまったと本多は思った。庭は夏の日ざかりを浴びてしんとしている』

居酒屋もしんとしている。Mは立ち上がりながら、「僕もそんなところに行ってしまった。何もない部屋だったよ」

と、ぼつりと言った。

トイレに行ったのだらうと思っていたが、Mは帰ってこなかった。主人は二千円のうち一枚だけ受け取った。

三 常^{ひたち}陸のすけ

通りは酔客が目立つ。やたら大声を張り上げている。

ガード下に人が集まっていた。田代は足を止めた。人が群がって、騒いでいる。―常陸のすけ―と叫んでいる。拍手をしている者もいる。人の間から覗くと、汚れた袈裟を着た老婆が人々に取り巻かれていた。

「乞食、乞食」

周りが拍手と一緒に囃す。女は笑っている。顔は薄汚れ、歯は一本もない。袈裟は垢まみれだ。

「よお、常陸のすけ」

と、言う声がまた飛んだ。

「地藏様のお供えを食ったな」

中年の女が言った。店の女だろう。

「あれは供養地藏や。ここでようけ人が死んだんや」

老人が女を杖で突っつき、非難するように言った。

「仏の供養なら、仏の御弟子の私が戴いてなんの罪がありましたしょう」

女はへらへら笑いながら言った。

「許したるから踊れ」

サラリーマンがネクタイを緩めながら言った。声につられるように女は踊り出した。

「夜は誰と寝ようかな。常陸のすけと寝よう。肌が合う」

腰を卑猥に振る。

「やりたいな、ああ、やりたいな。常陸のすけとやりたいな。大きいな、大きいな、常陸のすけは大きいな」

女は跪いて、俯き、両手で何かを受けるような動作をした。そして、ゆっくりと顔を上げ、両手の掌を頬に愛おしそうに擦りつけた。

「キヤー、やらしい」

女が素っ頓狂な声を上げた。

「何を考えとんや」

男が女の頭を叩いた。どっと笑いが起こった。その時高架を走る電車の光が女の目元を浮かび上がらせた。何処からか女が舞い降りてきたような気がした。

「それ、それ」

周りが合いの手を入れる。

「たて、たて」

常陸のすけが節をつけて歌い、踊る。男が若い女の肩を押した。立っていられないほど女は酔っている。

「お前も踊れ、腰を振れ」

男が言う。女は笑いながら腰を突き出す。

「やりたいな、ああ、やりたいな。常陸のすけは大きいな」

女は常陸のすけをまねて歌い、エロチックに腰を振った。やんやの喝采が飛ぶ。男が飛び込んできた、女に向かって腰を突き出す。男も女も笑っていた。

「警察がきた」

誰かが叫んだ。蜘蛛の子を散らすように逃げる。

女と田代だけが残された。女は激しく吐いた。警官が女を抱え上げた。もう一人の警官が田代を睨むので急いでその場を離れた。いつの間にか常陸のすけの姿は消えていた。また、満員の通勤電車が高架を通り駅に吸い込まれて行った。

久しぶりの通勤電車だった。優先座席に汚れた袈裟を着た女が座っていた。乗客は誰も気づかないみたい。電車が揺られている。破れた袈裟から、固い乳房が覗いていた。股間に陰毛が無雑作に見え隠れしていた。顔は汚れていたが、女は若かった。そして、美しかった。短いトンネルを抜けると、女の姿は消えていた。

*

「みなさんどうでした？」

妻に言われて、「大阪へ行く」とだけ言って出かけたことを思い出した。遅い夕食を食べて書斎に入った。

*

ネットをつなぐ。

『常陸の介』と、検索した。いくつもヒットしたが、女法師常陸の介（枕草子）に目がとまった。

「法要の席に紛れ込んできた女法師があった。供物をお下げ願いたいと言う。若い女房たちが珍しがって、芸をさせる。「常陸のすけと寝む」の歌謡を猥褻な言葉と仕草で女乞食は踊る」

「註」この時代の女法師は下賤の者で、物乞いや、猿楽の芸をしたり、中には春をひさぐ者もあつた。

田代は女法師に卑屈さを感じなかつた。気高くさえあつた。ガード下で踊る女法師は常陸のすけに重なり、取り巻く男女は常陸のすけをそそのかす女房たちと重なつた。

四 N

青春十八きつぷを買つて、日帰りの旅に出た。Jの普通列車に乗り放題の切符だ。一枚で一日有効、五回分。意外と遠くまで行けた。これも念願だつた。八月に一人娘が結婚をした。何もかも自分たちでやり、夫婦は出席するだけだつた。夫婦二人だけの生活が始まつた。

十月に母が亡くなつた。長男任せで他人のような顔をしていた。感傷は何もなかつた。この小さな体から生まれたということが不思議だつた。

季節は次々と変わった。

「速いな」

田代は実感した。地球の自転が速くなったように日が過ぎていく。春から夏、そして秋、冬と。

冬に一度夫婦で旅行に行った。定年後の計画は着々と進んでいった。

いつの間にか一年近くが経っていた。あまりの早さに寿命がどんどん短くなる気がして不安になった。有り余る時間の感じは少しもなかった。老化だけが進んで行く気がした。このまま死へ向かって進むのだろうか。

春に東日本で大地震があった。大津波が押し寄せ、原子力発電所が破壊した。田代は一部始終をテレビで見ていた。

秋には台風が二つ来て、多大な被害をまき散らした。台風を恐れたが、直接の被害は何もなかった。台風の去った後、夏は突然に終わった。色々なことがあったが田代の日常は何も変わらなかった。

*

A 新聞デジタルを申し込んだ。新聞もネットで読めるようになった。何気なく、連合赤軍で記事検索

をすると、Nの記事が出てきた。今年の二月に死んだらしい。半年以上過ぎているが知らなかった。

ⅠN死刑囚、死亡 連合赤軍Ⅰ二〇一一年二月六日

朝刊 1 社会

一九七一〜七二年に起きた「連合赤軍事件」で、新左翼運動の仲間を殺害した罪などに問われ、九三年に死刑が確定した元連合赤軍幹部のN死刑囚が五日午後十時六分、東京・小菅の東京拘置所で病氣のため死去した。六五歳だった。法務検察関係者によると、死因は脳腫瘍（しゅよう）による多臓器不全とみられる。

八四年には脳腫瘍の手術を受け、その後も病院への移送などを求め、国などを相手取った訴訟を起こしたが、認められなかった。その後も頭痛や目の痛みを訴え、寝たきり状態が続いていたという。Ⅰ

同世代が起こした事件だ。田代は学生運動に加わらなかったが無関心ではなかった。「同じ電車に乗ったが、仲間は次々と降車し、彼らが最も遠くまで

行った」と評した人がいた。大部分は、電車にも乗らなかった。田代もそのうちの一人だ。乗った人間も、宴が終わると、さっさとゲバ棒を納め、背広を着て、ネクタイを締めた。

田代の世代には田代たちだけが分かるにおいのよ
うなものがある。シンパシーと言ってもよかった。
社会に出ても同じだった。青臭い厭なにおいだった。

*

その日は久しぶりに大阪に出て行った。用事はす
ぐに終わった。帰りはK駅で乗り換える。西出口を
出る。「だるま」は準備中だった。電波時計を見る
とまだ四時半だった。人通りも少ない。居酒屋やす
らぎに行ってみようと思った。開いていなかったら
帰ろう。一年以上経っているのだからなくなってい
るかもしれない。雨の気配がした。通り雨が降った
のかもしれない。石畳が濡れていた。路地の奥に提
灯が見えた。すでに灯がついている。ぼんやりとし
た灯りがかすかに揺れていた。

「らっしやい」

右の奥から声がした。声をした方を見るが何も見

えない。どんな構造になっているのだろうか。

テーブルに女がいた。田代は常連でもないのに居場所を取られたみたいにな気になった。

「どうぞ」

と女が言った。田代は少し躊躇したが、女から一番遠いテーブルの端に腰掛けた。

女は二十歳半ばだろうか。目が異様に大きかった。癖毛だろうか、髪は乱れていた。この容貌に見覚えがあったが思い出せない。女は猪口をそっと口に持っていき、

「美味しい」

と、呟いた。

「わたし、沢山人を殺した」

女が言った。その時思い出した。Nだ。今年二月に死んだ。何年、刑務所にいたのだろうか？ 同じ時代に生きながら、最も離れた場所にいた女だ。だが、やはり同じにおいがした。

「一瞬よ。終わってしまえば」

女が言った。

「反省なんかするものか」

女は小さく続けた。

いつの間にか主人が横に立っていた。黙って、一皿置いた。

「分けたらええ」

焼き魚が一匹のついていた。

「骨を取ったげるね」

女が、細かく肉と骨を分けた。田代は笑った。

「おかしい？」

「真剣な顔をしているから」

田代は取ってもらった肉を口に運んだ。

Nは食わずに黙って田代が食べるのを見ていた。

「あんたいくつ？」

長い沈黙の後、女は訊いた。

「いくつに見える？」

「分からへんなあ。そんなに人に会うてへんもん」

大阪弁を喋るとかわいい。

「大阪の子かいな」

主人が聞いた。

「ちやう、ちやう」

主人は笑った。初めて見る笑顔だった。

「六十五才」

田代は答えた。

「ふーん、同い年か」

女は少し恥ずかしそうな顔をした。

「おじいさん、子供はいるの？」

「いるよ、女の子」

「わたしにいたら怖い」

「孫もいるよ」

「孫まで責任取れないね」

Nは笑った。

長い沈黙が流れた。骨だけになった魚が残った。

Nは一口も食べなかつた。

「たらなんて思わなくなつた。人生ってみんな結果じゃない。変えられない。そう思わない？」

Nが突然言った。

「昔、人を一杯殺した女がいた。捕まって、ずーつと閉じ込められて死んだ。過去なんて何を言っても終わりなの。無意識に嘘が混じるし、終わったことは変わらない。でも、牢屋の中で、膝小僧抱えて、いつも思っていたなあ。革命を起こさなきゃ」

「革命か。昔聞いたことがある」

田代は薄ら笑いを浮かべながら言った。Nは田代から目を逸らした。

「もう一度闘いたい」

Nは言った。田代はコップにゆっくりと酒を注いで、そっと、Nの前に滑らせた。Nは美味しそうにゆっくりと飲み干した。そして、言った。

「生まれてしまったから」

その時、部屋が揺れた。

「たいしたことあらへん」

主人の声が出た。座敷の奥がぼんやりと明るくなった。テレビのスイッチが入ったようだ。しばらくして、テロップが流れる。

「震度3か……」

ため息をついて首を戻すと、前には誰もいなかった。

雨の音が聞こえてきた。

「降ってきたなあ」

引き戸を開けながら主人が言った。

五 雨宿り

「傘は貸さへんで。一本しかあらへんよって」

主人は言った。

「かまへん。一つ走りやから」

雨で煙る路地を駆け出そうとして、提灯の明かりに浮かび上がった影に気づいた。大きい荷台に一杯の荷物を積んだ自転車が止まっていた。小さな男が、軒にへばりつくように空を見ていた。しきりに手拭いで顔を拭いている。かすかに自転車に見覚えがあった。駄菓子を積んで配達していた父の自転車だ。ガラツと戸が開いた。

「入ったらええ。濡れるがな」

主人が言った。男は何度も頭を下げた。主人は田代を手招いた。引かれるようにまた居酒屋に入った。

「自転車も入れとき」

「えらいすんまへん。急に降ってきたよって」

若い父だった。雨粒を払い、重い自転車を中に入れた。

父は何度も頭を下げながら田代の前に座った。

「えらい降ってきましたなあ」

そう言って父は黙った。商人だが、寡黙だった。

お世辞一つ言えない人だった。

「一本もらいまひよか」

父は主人に言った。

「気にせんでええよ」

主人は言った。

「好きな方やさかい」

愛想笑いを浮かべて父は言った。

「おお、お前か」

驚いたように父は言った。

父は商店の屋号の入った前掛けで手を拭いた。家の屋号ではなかった。当時還暦や開店などの記念に屋号の入った前掛けを配った。まだ家の屋号の入った前掛けは作っていなかったのだろう。あの頃の商人はみんな前掛けをしていた。田代が高校に入学した頃、同年の男の子が「格好悪い」と言い出した頃から前掛けは急速に廃った。家の子であった田代は前掛けをしたことがない。

「鶴橋に行ってきたん？」

「森さんここに寄ろ思たんやけど」

父は手酌で酒を飲んだ。言葉が途切れた。

父と面と向かって話した覚えはあまりなかった。いつも誰かが間に入っていた。二人でいると気まずい雰囲気があった。

父の思い出はあまり多くない。若い頃の父はいつも働いていた。台風の前、窓に板を打っていた。田代は板を支えていた。父が田代の指を叩かないように気をつけているのが分かった。小学生の頃、映画鑑賞の日に寝過ごしして、自転車で映画館まで送ってもらった。荷台で父の腰にしがみついていた。

父は鮎釣りをしていた。川原で手持ちぶたさに遊んでいた田代が支流に行くと磨崖仏があった。巨大な彫刻が田代をのみ込むように見下ろしていた。一目散に逃げ出し、必死になって父を探した。

田代は一つ一つを確かめるように思い出した。古い映画のような記憶だ。

しかし、父の老年の姿ははっきりしてくる。死の様子はあまりにも鮮やかだ。

近頃、自分の中に父がいると実感することがある。

自分の中にいる父親が言わせたり、させたりするのだ。自分はどんどん父に近づいていく。

主人が皿を置いた。

「鮎でつか。今頃やったら、落ち鮎やなあ」

と、言っつて父は田代を見た。

「あんた、食べ」

父が言っつた。

いつの間にか雨の音は聞こえなくなつていた。父はせかせかと立ち上がった。

「ごっつあん」

父は言っつた。

田代は「居酒屋やすらぎ」の提灯の下に立っつていた。濃い霧が出ていた。石畳の向こうに自転車が見えた。荷物にかけた紐を締め直している。写真のネガのように反転した自分が雨の中に浮かび上がった。自転車の重み。雨に濡れたシャツ。頭の中に浮かぶ夕餉の楽しみ。主人の彼だけに拵えた酒の肴。一合の酒。心地よい布団。明日の商い。彼が思い浮かべているのは田代と同じだ。自転車はゆつくりと揺れながら、霧の向こうに消えた。気がつくと、「居酒屋

屋やすらぎ」の提灯は消えていた。

霧の中をさ迷った。やっと駅前に出た。「だるま」で生ビールを一杯飲み家路についた。特急で座って帰ろうと思った。居酒屋やすらぎにはその時以來行かない。

了

二〇一一年一〇月二十九日

引用

天人五衰・三島由紀夫著

参考

枕草子・萩谷朴校注 第八十二段 新潮日本古典

集成

十六の墓標・永田洋子著

第一話 虎追い

多数のコマーシャルメールに埋もれるように、「補巖寺参る」という件名のメールがあった。僕はメールをクリックした。本文は「補巖寺参る。八月五日、午後八時より」とある。

補巖寺は、僕が住む百軒ほどの住宅団地を出て、川沿いに細い道を辿り十分ほど歩いたところにあるさびれた寺だ。朝のウォーキングで通ることがあるが、入ったことはない。古い瓦屋根の小さな門があり、いつも閉まっている。外からは門と鐘楼しか見えない。中に庫裏があるらしいが人の気配はない。一度横手から入ろうとして、隣家の犬に吠えられた。それっきり入ろうとも思わない。世阿弥のゆかりの寺だという説明の立札があったが、能は門外漢である。

寺の前に子供公園がある。妙にリアルな虎とリスの乗り物がある。姿も表情も玩具だが、生きている

ようでいつも見る度にハツとする。他にジャングルジムと鉄棒、塗料のはげたブランコがある。しかし、子供の姿を見かけたことはない。

七月の終わり、門前を掃く老婦人に声をかけた。彼女は寺の隣に住む人で、寺の世話をしている。檀家だと言うだけで、特別の縁はなさそうである。老婦人は、寺には誰もいない。本堂もない。夏は雑草が茂って大変だと歎いた。八月八日は世阿弥の命日で参る人がいるらしい。

二回目のメールが来た。「補巖寺参る。八月五日、午後八時より。虎を追い出します」。虎……。少し興味がわいた。何のことだろう。行かなければ永遠に分からない。それはいやだなあ。

「ひよっとしたら出かけるかもしれない」と僕は妻に言った。

「そんな夜中にどこへ行くの」と妻は聞いた。僕はメールのことを話した。

「団地から外は真っ暗だよ」と妻は言った。

「たしかに」と僕は言った。妻は押入から懐中電灯を取り出した。

「これで、完璧。でも、川に落ちたらいやよ。あなたは泳げないから」

「気をつける。でも、行かないかも」

「多分あなたは行くわ。強迫神経症だから。でも、虎が飛び出してきたら逃げるのよ。噛まれないでね」

妻は笑いながら言った。

その夜は闇夜だった。団地から出ると、鼻をつままれても分からない闇になった。懐中電灯のスイッチをさぐっていると、目の前がぽつと明るくなった。前からやって来るのは提灯だった。懐中電灯もいないほど明るい。浴衣の裾を端折った中年の男が近づいてきた。

「暑いことです。岩田さんですね」

僕は頷いた。

「補巖寺から来ました。和助と言います」

男は言った。男は僕の足もとを照らすように歩いた。川の音以外何も聞こえない。男は僕の歩く速さに合わせてくれている。

「虎を追い出しますって？」

僕は聞いた。

「屏風の虎を追い出して捕まえるのです」

男は答えた。何のことか分からないが、黙って歩くことにした。川面を渡ってくる風が意外に涼しい。

広い農道に出るまで、対岸に渡る橋は三本ある。他にも橋があるが、農地に行くためであったり、家のためであった。三本の橋は、渡ると決まって地蔵がある。地蔵は小さな地蔵堂に東を向いて鎮座している。きれいに掃除されていて供花が枯れていることはない。補巖寺へは二番目の橋を渡る。

地蔵に蝋燭が燃えていた。特別な夜だと言っているようだ。地蔵に手を合わせた。ほんの十分ほどしか歩いていないのに、ずいぶん遠くへやって来たような気になった。坂道を下って集落に入る。子供公園が見えた。その奥が補巖寺だ。

補巖寺は村の西端にある。東に進むと、同じ苗字の大きな屋敷が続く。文化財にも指定されている庄屋屋敷だ。東の端に神社がある。大きな切り株があって、しめ縄が張られている。その周りにも木が多いが、ずば抜けた大木であったのだろう。神社の横

を通り抜けると一面の稲田だ。今は初穂が出ている。子供公園は夜のしじまに沈んでいる。虎とリスの人形の気配を感じる。提灯の明かりが人形に当たった時、二匹は僕の方を振り向いたように思った。

補巖寺の門は開かれていた。篝火が燃えていて、その一角が昼間のように明るかった。和助さんの姿が門に吸い込まれるように消えた。僕は急いで後を追った。石畳を進むと、小さな池があった。その向こうに見えるのは本堂らしい。老婦人が「ない」と言っていた建物が整然とした趣で建っていた。

本堂に隣接した建物があった。本堂と渡り廊下でつながっている。和助さんはその建物に僕を誘導した。踏石でサンダルを脱いで廊下に上がった。和助さんが障子を開けた。

部屋の隅に先客がいた。痩せた小さな男だった。

「控室でしばらくお待ち下さい」

和助さんは男の隣の座布団を示した。男は僕の方をちらっと見たが、すぐに目を反らした。僕は小さく挨拶をして腰を下ろした。場違いなところへ来たような気がした。来なければよかったと思った。僕

は小心者である。男も同じようだ。身を縮めて時々
思い出したように額をぬぐった。夏の夜なのにあま
り暑さを感じない。この部屋は涼しくさえあった。
部屋を見回したが冷房器具は見当たらなかった。し
ばらくすると、人の気配がした。和助さんの後から
入ってきたのは、ハツとするほどの美女だった。年
は二十歳になっていないだろう。最も離れた部屋の
隅に坐った。俯いてじっとしている。浴衣を着てい
た。紺の生地に朝顔が咲いていた。

和助さんは客の前に湯飲みを置いてお茶を入れた。
何とか焼きだろう。高級そうな湯飲みだ。誰も手を
出さない。僕が最初に湯飲みを手を取った。茶の香
りが心地よかった。

—これから何が始まるのだろうか？—

熱い茶を飲みながら思った。

次に騒がしい音を立てて、背広姿の男達が入って
きた。年配の男を先頭に、若い男が三人その後につ
いた。男達は部屋の奥に向かって横並びに座った。
一番左の年配の男が口を開いた。

「えらい暑い日にご足労をかけます。私、木村均と

申します。右に並んでいるのが長男、次男、三男です。他に娘が二人おります。貧乏人の子だくさんで」

男は音を立ててお茶をすすった。

「何してんねん、はよ自己紹介せんかいな」

ぼけっと坐っていた息子達が順番に名のった。

「私で庄屋は二六代目らしいですわ。最初は室町時代でつか。家が大きいてええな思うの大間違いでつせ。掃除も大変、マンション住まいが夢なんですわ。まあ、かなわへんやろけど」

二六代目木村均さん。もちろん、名前を聞くのも顔を見るのも初めてだった。

「今夜は百年ごとの『虎追い』です。えらい時にあたったなあ。虎は普段は屏風の中で大人しうしてるんやけど、まあ、池の水を飲みに行く程度ですわ」
庄屋はお茶を啜って反応を待ったが、誰も何も言わない。仕方なしに湯飲みを置いて続けた。

「ほんで、百年に一回は追い出して、しっかり捕まえて、屏風に閉じ込めなあかんちゆうんが始まりらしいんですわ。せやないと、村の人間がひとり残ら

ず食い殺される。まあ、言伝えやけど。それで皆さんにお願いしたわけでございます。ええっと」

僕の方を見て言葉につまっている。

「A団地の岩田です」

僕は頭を下げた。

「そうや、岩田はんやった。岩田さんには『虎追い』の見届け人をお願いします」

「何をするんですか？」

僕は聞いた。

「見とつたらええんや」

長男が威圧的に言った。

「あほみたいにな」

次男が笑いながら言った。

「お客様に失礼やろ」

そう言いながら、庄屋も笑っている。帰ろうかと思つた。

「次は、お嬢ちゃん。虎を追い出すんは、虎が懸想するぐらいの別嬪で十七才以下の生娘と決まってるんねん。十七才以下はようけおんねんけど、生娘がなかなかおらへん。うちの娘もあかん」

庄屋は頭をかいた。

「別嬪ちゆう条件にも当てはまらへんわ」

三男が言った。庄屋は、「それもそや」と、笑っている。

「ほんで、多おおの小夜ちゃんにお願いしたんや」

娘は無表情に頷いた。

「最後は飛び出してきた虎を捕まえる役や。前回の明治の時は、十とういち市村の十両の力士がやったらしい。せやけど、今回は横綱や。八郎君頼むで」

八郎と呼ばれた青年は体を震わせて頷いた。そして、小さな声で言った。

「横綱いうても指相撲の横綱や」

障子を開けて和助さんが入ってきた。

「用意が出来ました」

和助さんが言った。

「ほな、行こか。それと、い……」

「岩田です」

「せや、岩田さん。最後に言うのかな。あんたは、見届け人やから、どんなことがあっても手を出したらあかん。じっと見とくんや。あんたには何なんにも起

こらへんよって」

僕は頷くしかなかった。

和助さんが先導して、庄屋を先頭に渡り廊下を歩いた。外陣から障子を開けて本堂に入る。灯明が燃えていた。和助さんが、それぞれの席に案内した。一番前の布張りの床几に小夜さん、その横に少し下がって八郎君。その後ろに僕だ。

僕の背後に庄屋一家。外陣に和助さんが控えた。本尊の前で老僧が一人読経していた。布張りの床几に小夜さんの形のいいお尻がのっている。八郎君は人差し指と親指を盛んに曲げたりしている。虎と指相撲をするつもりらしい。小夜さんはまっすぐに前を向いている。

「虎なんか出てきいひん」

「出てきたら、動物園に売ったる」

後ろで庄屋の息子達が話している。落ち着かない連中だ。がさがさと動いている。

若い男が二人がかりで屏風を運んできた。そして、屏風を置いてさっさと出て行った。庄屋に促されて、次男と三男が立ち上がり、屏風を開いた。その瞬間、

虎が小夜さんめがけて躍り出た。小夜さんは手を合
わせて小さくお経を唱えた。虎は少しひるんだよう
だ。

「八郎君！」

庄屋が叫んだ。長男と次男は部屋を飛び出したよ
うだ。三男は腰を抜かして起きようにも起きられな
い。何か叫んでいる。虎は小夜さんを睨みつけ、う
なり声をたてた。八郎君はと見ると、親指を立てて
人差し指を虎に向け、「いざ、勝負、勝負」と叫ん
でいる。次の瞬間虎は小夜さんに飛びかかった。灯
明の明かりに鮮血が飛び散った。僕は小夜さんに駆
け寄った。

「動くな」と庄屋が言った。灯明の火が消えた。真
の闇になった。

「帰ったようです」

和助さんの声がした。提灯の明かりが近づいてき
た。本堂には誰もいなかった。目の前に屏風があっ
た。和助さんが提灯を近づけると虎がいた。じっと
僕の目を見ていた。その口元が真紅に濡れていた。

「和助さん」

そう言ったとたん、僕は、補巖寺の門の前に立っていた。振り向くと和助さんの提灯の明かりが闇の中にひとときわ輝いていた。

第二話 幽霊

ポストに案内状が入っていた。

「補巖寺参る。八月十四日、午後八時より。阿茶あちや

様供養。盆供養も行います」

「阿茶様って誰？」

案内状を覗き込んで妻が言った。

「知らない」

僕が答えると、

「あちや」と、妻は珍しく冗談を言った。僕が驚くぐらい珍しいことだった。

「行くの？」

「行かない」

そんなことよりテレビの巨人・阪神戦の方が気がかりだった。阪神が勝つかもしれない。阪神が好きと言うより巨人が嫌いだった。結局阪神が珍しく勝

ってゲームは終わった。 iPadにメールが来ていた。

「補巖寺参る。追伸。阿茶様が出席されます——本人が出席するの。幽霊じゃないか——僕はiPadを閉じながら思った。そして、その件は忘れた。

八月十四日。ドアホンが鳴った。モニターに和助さんが映っていた。この前と同じ柄の浴衣を着ていた。

「お迎えにあがりました」

とにかく玄関を開けた。

「無理強いみたいになりましたか」

「いいや、僕も行こうと思ってました」

意志薄弱。これが僕の欠点である。これがなければもっと出世しただろう。急いで半ズボンを着替えた。

団地を出ると上弦の月が出ていた。空はまだ明るい。少し涼しくなった気がするが蒸し暑い夜だ。二番目の橋を渡る。地藏に蠟燭が燃えていた。この地点から温度が下がった。少しずつ違う場所に歩を進めているのだろう。盆踊りをしているようだ。風に

乗って聞こえてくる。

「今夜は落語もあります」

和助さんが言った。

「落語？」

「二つ目だか三つ目だか、聞けたもんじゃありません。短いのが救いです。五代目桂文枝はよかった」

「今は三枝ですね」

「あれはダメです」

一言で切り捨てた。

「五代目の桂文枝をお聞きになったんですか」

「ええ、補巖寺に定席を持ってました」

僕はもちろん知らない。

公園に着いた。今日は子供達が四、五人遊んでいた。虎とリスに子供が乗っている。虎もリスも楽しそうだ。

門は開いている。前と同じで、篝火が燃えていた。門をくぐると、空気が一変した。

「ここから、変わるのだ」

二回目だから少し落ち着いていた。

控室の障子にいくつか影が映っている。女もいる

ようだ。踏石から廊下に入った。先に立った和助さんが、ひざまずいて障子を開けた。庄屋がいた。息子達の姿はなく女が二人いた。娘だろうか？ 村人らしい男が七、八人いた。膳が用意されていて酒を飲んでいる。

「やあ、すんまへんなあ。い……」

「岩田です」

「せや、岩田はんや」

庄屋は顔を真っ赤にしている。ろれつも少し怪しい。僕は空いている膳を手で示された。酒は嫌いな方ではない。喜んで座った。出囃子が鳴った。障子を開けて落語家が入ってきた。正座して障子を締め一番下座の大きな座布団に座った。

「ええー、今夜は阿茶様供養と言うことで、あちや、なんて」

妻と同じレベルだ。誰も笑わない。勝手気ままに喋っている。僕は手酌で飲んだ。

「えらい気のきかへんことで。克子、お客に酌せんかいな」

克子と呼ばれたのは浴衣を着た大柄な女だった。

もう一言つけ加えるなら、とても不細工な。女は僕の前にドタッと座った。化粧の匂いに顔をそむけたひょうしに、落語家と目が合った。落語家は注目されていと思ったのだろう、もみ手をして嬉しそうに笑った。

「お後がよろしいようで」

終わったようだ。落語が終わると、男達の会話が耳に入ってきた。

「それで、十年前は出たの？」

「出なかったそうだよ」

「二十年前も三十年前も出なかった。じいさんは？」

「俺が生きている間は、出たって話は聞いたことがない」

「やっぱり迷信だ」

横から銚子を持った手が伸びてきた。所在なさそうに座っていた中年の男だ。僕は頭を少し下げて猪口を差し出した。

「小学校の教師をしています。阿茶様は村の方ではありません。村では十年に一度、他の大字だいじの人を呼

んで供養をしています」

「それで僕が呼ばれたのですか。どうして僕なので
すか？」

「どうしてでしょうね。私は人選に関わっていませ
るので」

男は眼鏡を外して指で拭いた。癖なのだろう。ふ
つと、息を吹きかけてこすっている。

「阿茶様って変わった名前ですね」

僕は言った。

「室町時代の人ですから」

「室町時代……」

歴史の年表を頭でめくる。みんなうる覚えだ。

「世阿弥の命日が一四四三年八月八日と考えられて
います」。八月八日か……。とっくに忘れていた。

「阿茶様はその頃の人らしいです」

男は目をしょぼつかせて言った。ずいぶん昔の人
だ。女の人だろうか？ 盃を飲み干して返杯すると、
喋ることが何もなくなった。男はこそこそと、自分
の席に戻っていった。座敷は賑やかになってきた。

落語家が庄屋にお酌をしている。恐怖のカラオケが

セットされた。僕は自他共に認める音痴だ。もう帰ろうと思った。その時、和助さんが近づいてきて、僕の耳元で囁いた。

「準備が出来たようです」

渡り廊下に出たが、誰もついてこない。

「僕だけですか？」

先導する和助さんに声をかけた。

「そうです。そろそろ阿茶様が来られます」

本堂に入った。灯明が燃えている。本尊の前で老僧が一人読経していた。和助さんは僕の背後に座った。カラオケが聞こえる。あれは庄屋の声だ。

「村のものは供養に出ることはできません。私も村のものですから、お出でになりましたら、退出させてもらいます」

読経が終わり老僧が退場した。気づくと和助さんの気配も消えていた。風もないのに灯明の焰が揺れた。

―誰かいる―

灯明がぱちぱちと燃え、ひときわ輝いて、ふっと消えた。真の闇になった。闇の中で誰かが息を潜め

ている。

「ふふっ」と笑い声がした。女の声だ。

「阿茶様？」

「そうです」

女の澄んだ声がした。いつの間にかカラオケの声も消えていた。遠くで聞こえていた盆踊りの音も消えた。全ての音が消えていた。

障子が音もなく開いた。廊下に篝火の明かりがやつと届いている。薄明かりの中に女の気配がした。薄い薄い影のような気配だった。僕は立ち上がり女に近づいた。女の気配が動いた。同時に鈴の音がした。女は鈴を持っている。音が戻ってきた。僕は鈴の音を追った。盆踊りの音頭が聞こえた。だが、さっきのとは違った。

「念仏踊りです」

―早く来い来い 七月七日 七日過ぎれば お盆様
仏の供養だ 南無阿弥陀仏 盆はうれしや 別れ
た人も 晴れてこの世に 会いに来る―

女は歌った。渡り廊下を鈴の音が通る。控室の障子が開いた。中にいるのはさっきの人々ではなかつ

た。様々な人がいる。農民もいる。僧も侍もいる。女もいる。子供も老人も。笑い、喋り、奇声をあげているのもいる。日本語に違いないのだが、単語がかるうじて分かるだけで言葉が理解出来ない。次の瞬間、人々は話を止め一斉に僕の方を見た。

「行きましよう」

女が耳元で囁いた。

小走りに門を通り抜け、川に沿う道に出た。川には灯籠が次から次へと流れていた。それは遠い昔から流れてくるようだった。次々に現れ次々に消えていった。闇から現れ闇に消えていった。僕はゆつくりと歩いた。女も歩を緩めた。鈴の音は神社に向かっていているようだ。庄屋屋敷の門には提灯がぶら下がり、人通りが増えた。鈴にはぐれないように、人ぶつからないように歩くのはかなり難儀だった。だが、村人達にぶつかることはなかった。空気のように通り抜けることが出来た。

音頭が近づく。

— お月様でさえ 夜遊びなさる ワシの夜遊び 無理はない —

女は笑った。僕も笑った。

境内に櫓が建っていた。その周りを村人が踊っている。何かが手に触れた。

「踊りましょう」

女が言った。そして、手を引かれた。

村人には女が見えているのだろう。なにやら話しかけたり、笑いかけたりしている。僕はそれが羨ましかった。女の踊る気配がする。風が舞っている。

鈴が鳴っている。僕も見よう見まねで踊り出した。

―盆はうれしや 別れた人も 晴れてこの世に 会いに来る 念仏するのは 仏の供養 田の草取るのは 稲のため―

女の気配が遠ざかった。鈴の音が聞こえた。女が鈴を振っているのだと思う。

境内を出ると音頭は止んだ。振り返ると、誰もいない神社があった。巨木が闇の中にそびえていた。

鈴の音は村を通り抜けた。一面に青田が続き、その外れにぼつんとみすぼらしい小屋があった。鈴の音が止んだ。深い沈黙が押し寄せてきた。

「私と母^{かかさま}様は都から流れてきて、あの小屋に住ん

でいました」

女が言った。

「一軒、一軒、家の門かどに立って、母様が歌って私が踊りました」

急に寒くなった。頬に冷たくあたるものがある。

「雪だ」。ふと小屋を見ると、畦道を四、五本の松明が近づいてくる。

「種粃を盗んだって言われました。蒔く土地もない私達が」

小屋が闇の中で燃え上がった。

「熱い」

女は叫んだ。

いつの間にか補嚴寺に戻っていた。踏石を上がり、渡り廊下に腰を下ろした。部屋の灯りは消えていた。門の篝火がかすかに届く。その明かりに、庭の奥にある建物が見える。あれが庫裡なのだろう。

「おきな様」

女が言った。ぼんやりと白い単衣ひとえを着た男の後ろ姿が浮かんだ。

「翁様は私達親子を寺に招き入れて下さいました。

そう、あなたが座っているそこに腰を下ろして」

―踊り踊るなら　しな良く踊れ　しなの良い娘は

嫁にとる―

「母様が歌い、私は踊りました」

―阿茶は踊りが上手でございます―

奥様がおっしゃいました。

―ほんに、わしが教えたいものじゃ―

翁様が、おっしゃいました。

いつの間にか男の姿は消えていた。

月が庭を照らしていた。池のあたりがぼんやりと

明るい。女の気配が遠のいた。鈴が鳴り、庭草がサ

ワサワと動いた。僕は後を追った。

「池の面を見てください」

女の声が出た。池に月が浮かんでいた。風が吹き、

水面に細波が立った。薄い小さな影が流れた。―阿

茶様だ―　遠く離れた月が手の届く池面にあるよう

に、六百年近い昔の人が近くにいます。鈴が小さく短

く鳴って軽く肩を押された。振り返ると少女がいた。

少女は小さくて痩せていた。粗末な着物を着ていた。

所々に穴があき、黒く汚れた素肌が見えた。素足だった。髪はほつれているが赤い糸で括っていた。母様がしたのだろう。眉は濃く目は糸のように細長かった。その中に星のように輝く瞳があった。

「やっと会えたね」

僕は言った。

「楽しかった」

少女は言った。

「また、会えるかなあ」

僕は言った。

「もう、出会っているのかもしれない。過去と未来はつながっているのですから」

奇妙なことを言って、少女は笑った。笑うと左の頬にえくぼがあった。

「どこかで見たことがある——と思った瞬間、少女は消えた。」

「帰られたようです」

和助さんの声がした。

「今から五七〇年前、村人は乞食の母子を焼き殺しました。次の年から、飢饉が続き、母子の供養をす

ると収まったそうです。それが阿茶様供養のはじまりです」

二人は石畳を歩いた。

「翁様って？」

僕は聞いた。

「世阿弥様のことです」

和助さんは事もなげに言った。

「阿茶様供養ってどんなのだった？」

話しても信じてもらえないだろう。妻は、風呂上がりの濡れた髪の毛を拭いていた。

「もう寝ているの？」

話を孫の方に振った。昨日から遊びに来ている。

「遊びすぎて爆睡よ。それで阿茶様供養は」

「あちゃ」

僕はおどけて言った。

妻は笑った。左の頬にえくぼが見えた。

「補巖寺からメールが来ている」

僕の独り言に妻が反応した。

「今度は何？」

「薪能だって」

「季節もいいし、きれいだろうな」

「行く？」

「行ってもいいのかしら？」

「別にかまわないんじゃない。でも、何で檀家でもないのにお知らせが来るんだろう？」

「ダイジも違うし」と妻は言った。

ダイジとは大字おおあざのこと。家の住所にもついてきた。実際に書いたことはない。僕らは結婚してこの団地にやってきた。村がなくなった今でも地ちの人は地域を大字で呼ぶ。妻は地の人間ではないが四十年も住んでいれば習慣に染まったのだろう。僕はいつまでたっても馴染めなかったけれど。僕は慣れない手つきでiPadを操作してメールを読む。

「補巖寺参る。九月十九日、午後七時より。薪能

『世阿弥舞う』。シテ 世阿弥。並びに月見の会」

「お月見もあるのね。今年の中秋の名月は確か十九

日よ」

妻が弾んだ声で言った。

九月に入ると、一斉に蝉は鳴くのをやめた。死んだ。でも、時々真夏日がある。妻は単衣か袷か迷っていた。九月も半ばを過ぎたのに、その日も暑かった。

「今頃、単衣は変かしら」といいながら単衣に決めた。

ドアホンが鳴った。妻が出た。

「お迎えに参りました」

和助さんの声がした。和助さんは半袖を着ていた。

外はまだ明るい。和助さんは妻に驚いたようだ。

いつもの寡黙に輪をかけて地面を睨んで歩き出した。

「私も行っていいのかしら」

妻は屈託なく話しかける。

「誰でも」

「いいのね？」

「はい」

途中で同じ団地の奥さんに出会った。団地から出かけるのは国道の方に歩くのが普通なのにと、不思議

議に思っただろう。

「味間^{あじま}」

妻は答えた。

「へえ、知り合いでもいるの？」

「補巖寺に薪能を観に行くの」

「私も行きたい。ちょっと待って。旦那に言ってくるね」

こんな感じで、女は三人になった。姦しくなった。男はその前を黙々と歩いた。背後の二上山に夕日が落ちていくだろう。前方の三輪山の方角から満月が上っている。月に向かって歩いた。やがて、薄い墨が空気に混じるみたいに闇が降りてきた。補巖寺のあたりが少し明るい。橋を渡る。地蔵には蠟燭が燃えていた。今日はコスモスが供えてある。子供公園に人は集まりつつあった。老若男女、子供も多い。ブランコに老人が腰掛けていた。老人は小さく、そして美しかった。口元に静かな笑みを浮かべていた。手足も小作りで子供のようだった。僕はなぜか孫の颯太を思い出した。眼差しが幼児のようだった。どこかで見ることがある。すぐに庫裡にいた老人だ

と思った。妻が隣のブランコに腰掛けていた。いつの間に追い抜いたのだろう。

「月は美しいのお」

老人は鎖をつかみ、体を後ろにそらし、ブランコを小さく漕いだ。妻は老人の視線を追った。いつの間にか月は中空にあった。小さな村の外れにも、あまねくその光は降り注いでいた。寺で誰かが挨拶を始めた。町長選の時によく聞いた声だ。

「補蔵寺は町の宝でありまして」

「よく言うなあ、ほつたらかしにしよって」

老人が言った。口元の笑みも柔和な眼差しも少しも変わらなかった。

「どちらにお住みですか？」

妻が聞いた。

「補蔵寺にお世話になっていきます」

妻は不思議そうな顔をした。補蔵寺は無住だと知っていた。

「お一人ですか」

「ほっ、ほっ、沢山といるといえばそうだし、一人だといえば一人ですよ」

老人は、奇妙な笑い声を立てた。妻もつられて笑った。

「お食事も大変でしょう？」

「ほっ、ほっ、娑婆の人は大変だね。私は食べることもない、眠ることもない、しがらみが何もありません。ほっ、ほっ」

妻は老人が正気でないと思ったのだろう。話を変えた。

「私、能は何にも知らないんですよ。ノー」

「ほっ、ほっ」

親父ギャグが分かっているのだろうか？

「分かるように舞いましょう」

老人は言った。

妻は二、三回ブランコを漕いで、「はっ」と言って飛び降りた。代わりに僕がブランコに座った。町長の挨拶は終わっていた。静かな囃子の音が聞こえてくる。人々が門に向かっていている。

「始まりますよ」

僕は言った。

いつの間にか、老人は能面をつけていた。

子供の面だと分かった。すっと立ち上がった老人は童子どうじになった。

「月光がさしても目に見ることは叶わない。月にうとく、雨の音も聞くことができない藁家の暮らしは本当にわが身ながらもいたわしいことだ」

謡いながら補嚴寺の門に消えた。

庭には篝火が燃えていた。竹で作った舞台が渡り廊下から張り出して作られていた。舞台を照らすように月があつた。見事な中秋の名月だった。冷たい光だった。

「渡り廊下は橋掛かりになっております。あそこを通つて、シテ方があの世からやつて来ます」

耳元で和助さんが囁いた。橋掛かりの先は本堂である。廊下には松の盆栽が三つ置いてあつた。鼓の音が鳴り始めると、ざわめきは収まった。謡うたいが始まる。さっと橋掛かりの幕が上がると、童子の面をつけたシテがしずしずと廊下を渡り、舞台中央に歩み出る。先ほどの老人だろうが大きく見える。周りが縮んだといった方がよいのかもしれない。

「世阿弥様です」

和助さんが言った。

「それ青陽の春になれば 四季乃節會の事始め …

…」

「鶴亀です」

さっぱり分からない。曲の調子が変わった。シテはゆっくりと、実にゆっくりと下を向く。面おもてに月の影が宿り、表情が一変する。

「「蝉丸せみまる」です。盲目のため 帝みかどから逢坂山に捨てられた蝉丸と、狂い出た姉の逆髪さかがみのみや宮が琵琶の音にひかれて再会する場面です」

蝉丸はうつむき加減で舞う。蝉丸の盲目を表現しているのだろう。それはとても悲しい表情に見える。ひとしきり舞って蝉丸は橋掛かりに消えた。

「逆髪宮です」

和助さんが言った。

橋掛かりから女おんなめん面をつけた世阿弥が現れた。まさに美しい女人が舞い降りた。

「再会の場です」

和助さんは目頭を押さえた。泣いている。調子が速くなる。くるりと舞うと蝉丸の面になる。逆髪と

蟬丸がめまぐるしく変わる。逆髪がゆっくりと面を上げる。泣いている。僕は思わず「凄い」と声を出していた。またゆっくりと面を下げる。次に顔を上げると蟬丸の面に。いや、面ではなく、そこには再会に歓喜の涙を流す生身の姉と弟の姿があった。次に別れの場面に移る。僕は舞台に引き込まれていた。その時、妻の姿が目隅によぎった。振り返ると、少女と手をつなぎ門に向かって走って行く。阿茶様だった。妻を追おうと思ったが動けなかった。舞台は蟬丸の舞いになっていた。正面を向いて、どんと足を踏み鳴らした。上からゆっくりと翁の面が降りてきた。蟬丸の面を外し翁につけ替える。

「これやこの行くも帰るも分かれつつ知るも知らぬも逢坂の関」

そして、少し足を速めて、橋掛かりに消えた。一瞬に篝火が消えた。天上の月が誰もいない舞台を照らしていた。

「お送りします」

和助さんの声がした。

家に帰ると、妻は先に帰っていた。

「阿茶様とどこへ行ったの？」

「あの子が阿茶様なの」

僕は頷いた。

「とても楽しそうだった。私も楽しかったなあ。神社に行ったの」

「神社、近くの」

「近くとか遠くとか、そんなの分からない」

「まあ、いいよ。神社へ行ったのか」

「大きな木があつて、沢山いたよ」

「何が？」

「分からないわ。でも、子供よ。女の子も男の子も。

木の枝に腰掛けたり、葉っぱから葉っぱに飛び回っていた」

あの切り株だと思った。

「杉の木だね」

「知らない」

「まあ、いいよ。続けて」

「悪いけど、眠たいの」

確かに、妻の目はとても眠そうだった。

「それじゃ、明日聞くよ」

「ごめん、お休みなさい」

妻は二階に上がって行った。子供達がみんな家を出て行って、小さな家も広くなった。妻は二階で僕は一階で寝る。家庭内別居。

次の日、妻は、とても遅く起きてきた。急いで昨日の続きを聞いた。妻は何も覚えていなかった。自分が昨夜話したことも。

エピローグ

薪能から何日か経って、僕は役場に住民票を取りに行った。戸籍住民係に和助さんが座っていた。こちらに向かって、ぺこりと頭を下げた。和助さんは、^{ちよう}町の公務員だった……。

「住民票ですか？」

僕は頷いた。和助さんは書類を持ってカウンターの中から出てきた。

「こちらにどうぞ」

連れて行かれたのは小会議室だった。テーブルが

二つ、窓際にホワイトボード。

「この書類に必要な事項を書いて下さい」

用紙とボールペンを差し出した。女の職員が入ってきてお茶を置いた。特別待遇だなあとと思うと、ちよつと緊張した。

「どうも先日はお疲れ様でした」

書き終わるのを待って、和助さんが言った。そして、電話をした。

「住民票の手続きを頼む。ごめんね」

和助さんは戸籍住民係で少し偉いのだ。

「免許証か保険証かお持ちですか」

僕は免許証を渡した。和助さんは僕の前に腰掛けた。さっきの女の職員が入ってきて書類と免許証を持って行った。ノックもせず無言だった。ちらつと和助さんを睨んだ。

「補蔵寺のことは町の仕事ですか？」

なにかも仕組まれた演出かもしれない。そんな疑惑が頭をよぎった。

「ええ、そうです」

和助さんは即答した。

「不思議な体験でした」

僕は言った。

「何かあったんですか？」

和助さんは首をかしげた。考えれば、不思議なことが起こった時、和助さんはいなかった。和助さんはなにも見ていないのかもしれない。

「行事には金を使わないが業務命令です。なんせ、町は毎年赤字です。今度も、私の超過勤務まで上司に文句を言われました」

和助さんは前と打って変わって饒舌だった。

「でも、超過勤務手当で家族で焼き肉に行きましたよ。ささやかな役得です。私は和食の方が好きなんですけれどね。一番下のガキが肉が好きで」

「お子さんは何人ですか？」

僕も愛想の質問をした。

「三人です。女ばかりで」

その時、音もなく、また、女の職員が入ってきて、僕の前に書類と免許証を置いた。僕は席を立った。

和助さんは役所の出口まで送ってくれた。僕には気になっていることが一つあった。

「虎追いの時の女性のことですが」

僕が聞くと和助さんは怪訝な顔をした。そうして、
こう言った。

「虎追いに女はいませんよ。男ばかりの行事です」
車を一旦停止の標識で止めると、バックミラーに、
手を振っている和助さんが見えた。僕もパワーウイ
ンドウを下ろして、手を振った。

了

平成二五年十二月

【後記】

[目次へ](#)

ここには短編小説を収録しました。長編小説は池窪弘務作品集5に収録しました。

小説は主に投稿誌『星と泉』（星湖舎）に書いてきました。星湖社は経費も仕事もとても良心的な会社です。

女性を主人公にした小説が四作あります。『眠っている間に』イメージの断章を紡ぐように書きました。小説の種子は作者の生活にあります。例えば青木さんにとって、私はレジを通過する客の一人。それ以上でもそれ以下でもない。そんな青木さんが

小説の世界で動き始めます。

『ムツシユ』私（作者）はお子様ランチが好きです。でも、注文できない。ロボットなら……。ロボットが心を持ち始める作品です。当然「死」も。

『失われた言葉の断片』の事件はモデルがあります。殆どの登場人物にもモデルがあります。モデルとモデルの間は無数の虚構に埋め尽くされています。小説を書き終えた時、K君の自殺の真実がまた霧の中に遠のいた様な気がしました。もっと深い霧に。

『一期一会いちごいちえの女』2010年の十二月に妻と南紀の旅行をしました。定年後のとても楽しい思い出になりました。そこで出会った様々な女性たち、多分二度と出会わな一期一会の女性たち。南紀の美しい風景と共に描きました。

『蜚』川の記憶は二つあります。一つは中学生の頃、店の人や家族と行った川遊びの時のことです。旅館の窓からぼんやりと川を眺めていました。誰かが、「溺れたらしいわ。子供やて」と言いました。遠く離れた向こう岸を何人かの人々が一列になり上流の方にゆっくりと上がって行きます。筵をかけた水死

者を戸板に乗せて運んで行くのです。この光景は成人になっても何回も思い出します。もう一つは父の山小屋のすぐ下を流れる川です。父の夢は、川のほとりに小さな山小屋を建て、若い頃は忙しくて出来なかった鮎釣を思う存分することでした。夢は実現し、私達家族も楽しく過ごしました。二つの川の記憶が、『蛭』という小説になりました。

『居酒屋やすらぎ』私の人生において、強い影響を与えたいくつかの衝撃的な事件が起こりました。

『居酒屋やすらぎ』に現れるのは、そうした事件の当事者です。私のライフワークになった『枕草子』からも女法師が現代に着地します。最後に父の姿を書いて小説は終わります。

『補^ふ巖^{がん}寺^じ参る』毎日のウォーキングの途中に補巖寺という寺の前を通ります。今は無住寺になっていますが、世阿弥ゆかりの寺です。そのことから想を得た小説です。

『居酒屋やすらぎ』私の人生において、強い影響を与えたいくつかの衝撃的な事件が起こりました。

『居酒屋やすらぎ』に現れるのは、そうした事件の当事者です。私のライフワークになった『枕草子』からも女法師が現代に着地します。最後に父の姿を書いて小説は終わります。

『補^ふ巖^{がん}寺参る』毎日のウォーキングの途中に補巖寺という寺の前を通ります。今は無住寺になっていますが、世阿弥ゆかりの寺です。そのことから想を得た小説です。